

6:1 その後、イエスはガリラヤの湖、すなわち、ティベリアの湖の向こう岸に行かれた。  
6:2 大勢の群衆がイエスについて行った。イエスが病人たちになさっていたしるしを見たからであった。  
6:3 イエスは山に登り、弟子たちとともにそこに座られた。  
6:4 ユダヤ人の祭りである過越が近づいていた。  
6:5 イエスは目を上げて、大勢の群衆がご自分の方に来るのを見て、ピリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人たちに食べさせようか。」  
6:6 イエスがこう言われたのは、ピリポを試すためであり、ご自分が何をしようとしているのかを、知っておられた。  
6:7 ピリポはイエスに答えた。「一人ひとりが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」  
6:8 弟子の一人、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。  
6:9 「ここに、大麦のパン五つと、魚二匹を持っている少年がいます。でも、こんなに大勢の人々では、それが何になるでしょう。」  
6:10 イエスは言われた。「人々を座らせなさい。」その場所には草がたくさんあったので、男たちは座った。その数はおよそ五千人であった。  
6:11 そうして、イエスはパンを取り、感謝の祈りをささげてから、座っている人たちに分け与えられた。魚も同じようにして、彼らが望むだけ与えられた。  
6:12 彼らが十分食べたとき、イエスは弟子た

ちに言われた。「一つも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい。」  
6:13 そこで彼らが集めると、大麦のパン五つを食べて余ったパン切れで、十二のかごがいっぱいになった。  
6:14 人々はイエスがなさったしるしを見て、「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。  
6:15 イエスは、人々がやって来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、再びただ一人で山に退かれた。  
6:16 夕方になって、弟子たちは湖畔に下りて行った。  
6:17 そして、舟に乗り込み、カペナウムの方へと湖を渡って行った。すでにあたりは暗く、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった。  
6:18 強風が吹いて湖は荒れ始めた。  
6:19 そして、二十五ないし三十スタディオンほど漕ぎ出したころ、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て恐れた。  
6:20 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。恐れることはない。」  
6:21 それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。すると、舟はすぐに目的地に着いた。

癒しなどのみわざを期待してイエス様の許に来る人は大勢いました。しかし、イエス様の目的は彼らに、ご自身が天からのパンであることを知らしめることです。今日のみわざを期待して教会に来る人や、希望が叶ったと喜ぶ人がいますが、それだけでは悪霊の神々とさほど変わりません。それらを通して、主のみこころが分る必要があります。

「イエスはピリポを試すため」に、彼に質問し

ました。それはピリポなど弟子たちがイエス様のみわざについて、よく考えるようになるためです。今日も主は私たちが試すことがあります。それは教育的な配慮です。迷うときや悩むときは、イエス様が愛を持って、良い体験をさせようとしてくださっているのだと知りましょう。そして、しっかりと祈りと聖書からのみことばを通して神様の答えをいただきましょう。

また、しるしを見て信じた人々は、結局自分たちのことしか考えていませんでした。主のみこころが何であるかではなく、勝手に王を立ててこの世的な変革を望んだのです。

「この方こそ...預言者だ」というのは一見信仰のことばのようですが、実は神ではなく人間の考えを信じているのに過ぎないのです。神様の御心やご計画よりも自分の願望が先走っていないか考えてみましょう。

今日でも奇跡などのしるしを求めるクリスチャンも少なくありません。しるしはイエス様を証言している聖書によって裏付けられます。また聖書によって主のみこころがわかってこそ、意味があるのです。

弟子たちはイエス様を見たのに、恐れてしまいました。主イエスをいつも見て、いつも共に歩んでいないと、せつかくの愛の主が恐い存在に感じてしまうこともあるのです。しかし主は「恐れることはない」と言ってくださいますから、そのことばをいつも聞くようにしましょう。そして安心して主のもとに近づき、祈り、従って行きましょう。

- ①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）
- ②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）
- ③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）
- ④この世にあって何を実践しますか？